統一

第百四十九號

明治四十年七月十五日（毎月一回十五日）發行

（明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可　毎月一回十五日
明治四十年六月十五日發行　統一第百四十九號）

基礎金領收報告

一金壹圓也

右本團基礎金中へ寄贈相成り正に領收候也

明治四十年六月

北海道小樽山之上町
佐藤力藏殿

統一團

廣告

本誌編輯の用務は自今東京府品川町妙國寺内統一團編輯部に於て取扱候間、編輯上の用向は右へ直申込相成度又地方の教況は盛に御通信相、成度團友諸子に御依頼申上候

四十年六月　統一團

腦脊髓
精神病

帝國腦病院

東京市神田區和泉町
（電話　下谷七一七番）

院長ドクトル齋藤紀一明治卅三年專門學研究の爲め獨逸へ留學卅六年同大學卒業尚進て英佛專門病院を視察兩院にて診察す

精神病　專門

青山病院

東京市青山南町
（電話新橋三六四五番）

（三法堂目印）

●木佛具
金佛具

木像
廚子

大販賣

佛書表具の元祖
各宗御寺院御入用品一切何にても多少に限不御注文仰付らるべし佛書は申すに不及御肖像書專門

木魚位牌卸小賣

小包條例附郵券四錢

注意

佛書佛具佛像位牌木魚其種類品有之候へ共一々記載する能はず依て特に佛書正價附發賣目錄付被下候はゝ迅速進呈仕候此の目錄御用ゐになれば寺院樣方の御入用品一切の買物何程遠方でも座ながら安價にて買はれ申其の正札附の品は左の通り

三法堂發賣目錄（無料）

諸品

●佛書一切●過去帳●大般若經●一切藏經●戒壇分●位牌●太鼓●佛具金物一切●釣鐘●半鐘●木魚●拂子●曲錄●香●球數●大傘●號●燈具●ロウソク●ボンボリ●ロウソク●ボンボリ●ロウソク●ボンボリ

目次

篇章

七、1、本尊に關する重要教義　本多日生

八、2、佛教の統一的信仰　本多日生

諷誦章講義（第三十回）　阪本日桓

十法界抄講義（第五回）　阪本日桓

質疑應答　一記者

雜報

教學財團彙報

本尊に關する重要教義（承前）

本多日生講演

增田聖道速記

(3)三寶式よりの考察

本尊の樣式を解釋するには、又三寶式の方面より觀察しなければなりませぬ、それは中古已來法本尊であるとか、否人本尊であるとか唱へて紛爭を事として居る學者もありましたが、これは三寶具足の本尊であることを忘れた謬見と申さねばならぬ。法本尊派の人々は妙法蓮華經の文字を以て最上の法と思ひ、それが眞言の阿字の如に神秘的に尊敬せられて居るので、この文字の內容は何であるかを考へない、その力は眞如の力であるか、佛陀の力であるかをも知らない、只皮相の見解を以て文字神聖の說を立てゝ居るので、甚だ不健全なる思想であります、又人本尊派と云はるゝ人々は妙法蓮華經は久遠本佛の御名であるとか、又は本佛の當体が十界三千の全体であるから、それを本尊に顯はされたのであるとか云ふて、こゝに妙法佛名說の上に三寶の關係を忘れ、凡神的本佛觀の上に三寶の勸請を非認して居るので、兩派ともに一樣三寶具足の大本尊たることを閑却して居るのであります。

さて佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依する、之を稱して歸依三寶と云ふのて、これが佛教徒の歸順の表章となつて居るのでありまして、何人でもこの三歸戒を受けねば佛教徒と成るを許さぬが佛教の唯一の憲法であります。凡そ佛教經典に三歸を示さぬものはなく、又各宗の主義に於て之に反對する者はないのであります、百濟王が我朝に佛教を贈くるや佛像と經卷と僧尼との三寶を以てしたので、又聖德太子の憲法を制定し給ふ中にも篤敬三寶と定め給ふたのてある。之を法華經壽量品と涅槃經、觀普賢經等の有力なる根據に照しましても三寶に歸依するを以て、佛教の根本教義とすることは明白であると思ふ

優婆塞戒經（縮刷藏經第十七套第貳箱百四十七丁）に三歸を說いて曰く

若し人あつて能く三寶に歸し已れは、戒を受けずと雖ども一切の惡を斷じて一切の善を修せん。復在家たりと雖ども如法にして住せば、是れを名けて優婆塞となすことを得。と

この文は、佛敎徒の名を得るには三歸依を持つべきこと、その三歸を持つは、斷惡生善の根本なることを示されたのである

大般涅槃經（同第八卷第五葉）卷の八に曰く

佛に歸依する者を眞に優婆塞と名く、終に更に其の餘の諸天神に歸依せず。法に歸依する者は、則ち殺害を離る。聖僧に歸依する者は、外道を求めず。是の如く三寶に歸すれば、則ち無所畏を得ん。迦葉、佛に白して言く、我れも亦三寶に歸し上る、是を名けて正路と爲す。と

この文三歸依を佛敎徒歸順の表章とし又信仰の正路とし給へることが明かであります

大般泥洹經（同第八卷第十葉）卷の五に曰く（迦葉の偈）

優婆塞の法たるや、佛に歸依する者なり、一切の諸天神に歸依の想を生せず。優婆塞の法たるや、法に歸依する者なり、害生の法を以て而して非法の祠の爲めにせず。優婆塞の法たるや、僧に歸依する者なり、衆の邪道に於て良福田を請求めず。と

この文、亦三歸を以て佛徒の根本信條となすことが明かであります。

この三寶に就いて別相の三寶、同体の三寶（若しくは一体三寶）と云ふ南說がある。別相の三寶と云ふは佛法僧の三寶を名相ともに各別に認むるので、即ち佛寶とは丈六劣應身乃至三身即一の佛陀を云ふのである自覺覺他覺行圓滿と云ふて、絕大の妙智實相を照了し又最大の慈悲衆生を救濟し給ふ佛陀を指すのである。法寶とは、五時の所說小乘大乘經律論の三藏を指し敎法、理法、行法、果法を包含して居るのである。僧寶とは、佛の敎法を稟けて修因得果する聲聞緣覺菩薩を云ふのである。同体の三寶と云ふは、佛法僧の三名あれども結歸するに一体なるが故に、その一体の結歸を取るのであつて、之れには佛寶に約する一体三寶と

法寶に約すると、僧寶に約するとの別がある。佛に約する一体三寶の說は、佛は清淨の妙法身なれば即法寶である、又佛は最正覺の僧にして諸僧之に攝得せらると云ふのて一体の佛寶それが即三寶であるから、三歸は一歸依にて足れり、南無佛の一念そこに三寶具足せりとの主意である

大般泥洹經（縮刷大藏第八套第十冊百〇壹丁）卷の五、如來性品第十三に說けるあり（世尊の偈）

若し法に歸依せんとならば、應當に我に歸依すべし清淨の妙法身我れ已に具足するが故に、我れ諸の衆生の與に最眞實の法たり。若し衆僧に歸依せんとならば、亦當に我に歸依すべし、諸餘の一切の衆は皆佛僧の所攝なり。我れ諸の衆生の與に最正覺の僧たり。と

この文、佛寶に約する一体三寶の意分明なりと思ふ、優婆塞戒經卷の五、淨三歸品第二十に說けるあり

佛とは、能く煩惱を壞ぶる因と、正解脫を得ることを說き給ふ。法とは、即ち是れ煩惱を壞ぶるの因にして眞實の解脫なり。僧とは、煩惱を破ぶるの因と正解脫を得ることを稟受す。或は說いて言ふあらん若し是の如くんば、即ち是れ一歸なりとは是の義然らず、何を以ての故に、如來世に出づるも、及び世に出てざるも、正法常に有れども分別する者なし、如來出て已つて則ち分別あり、是の故に應當に別して佛に歸依すべし。と

この文初めに三寶の別相を說き、而して正解脫の法を中心として一体三寶の義あるを云ひ、又この義を非認して別相の寶に三歸依すべきを說かれてあります

大般泥洹經卷の五、迦葉の偈に（前出世尊偈の次に出づ）說けるあり

一切衆生の類、悉く應に自ら自身の如來藏を觀察すべし、皆是れ三歸依なり。一切衆生の類、此の經を信せん者は、若は已に煩惱を離るゝと、及び諸の未だ離欲せとざる、皆當に自身の如來微妙の藏に歸すべし、惟だ是れ正歸依なり、二無く亦三無し。然る所以は何ぞ、世尊廣く分別し給ふ、各々自身に如來

微妙の藏ありと、此の義を知るを以ての故に、復三に歸せず、我れ已に一切世間の眞實依たり、法及び比丘僧を一切攝受するが故に。と

この文は、己身に約して理の三寶を論ずる文である、これ行者に約する一体三寶であつて、台當二家の學者は往々この一体三寶を最後の歸趣と思つて居る、天台玄義の一体三寶說も、輝師本尊辯の一体三寶の結歸も俱に同系に屬して居るのである

本尊略辯（十下卷十丁）當に知るべし、事に約すれば、釋迦は本佛也、法華經は本法也、祖師は本僧也。もし理に約すれば、行者は即佛即法即僧也、故に御義には如來と云ひ、當体義には妙法蓮華の當体と云ひ、灌頂鈔には本眷屬と云ふ。大曼陀羅は、並に事理の三寶を開示す、而も理の一体三寶に悟入せしむるを正意とする也。と

輝師の說は、己身に約する理の一体三寶を取るものであることが明白であります。さて已上述ぶる通り、三寶何れも中心に立てゝ一体三寶が說かれてありますがこれは觀解の行に屬すべきであつて、信行の家には別相の三寶を取らねばならぬ。

大般涅槃經卷の五、如來性品第四の二に曰く（勝、迦葉に告ぐ）

名義俱に異なるとは、佛は名けて覺と爲し、法は不覺に名け、僧は和合に名け、涅槃は解脫に名け、虛空は非善に名け、亦無礙に名く、是を名義俱に異なれりと爲す。善男子三歸依とは亦復是の如し、名義俱に異なれり、何ぞ一と爲さん。と

この文は、三寶は名義俱に異なれるを以て、一歸依となすを誡責せられたのであります

日蓮上人の示されたる本尊には、この別相三寶の主意が極めて明瞭になつて居るのであります。それは言葉を以て勸請する御本尊の樣式に就いて考へたならば、尤も明白であると思ふ。即ち上人の眞撰に係る、撰法華經の勸請文に見ますれば、開迹顯本法華經中一切常住の三寶と說かれてある、これは、結經の「我れ今大乘甚深の妙義に依りて、佛に歸依し、法に歸依し、僧

に歸依す」との主意より來るので、上人は顯本法華の妙義に依りて、別相の三寶を勸請し給ひたのである。

佛寶としては久成無始の本佛、法寶としては結要果分の妙法、僧寶としては本化の大菩薩であります、その他の列座衆は證明、同伴、守護の意に過ぎませぬ。肖像之を本門戒壇の上より考察しますれば、斷じて理の一体三寶說に依ることは出來ぬことが愈分明になるのである、後段の三秘整足の本尊觀に就いて述ぶる所を對照あれよ

猶ほ住持の三寶に就いて一言せねばならぬ、住持の三寶と云ふは、佛の滅後に三寶の永く世に住まりて衆生を利益することを意味するのであつて、佛寶は生身の佛陀に代はりて舍利の信仰、塔廟の信仰となり、又泥龕塑像を佛寶となすと云ふて、泥像、木像、鑄像、刻像、塑像、畫像、繪像、文字像等として世に住まりまして利益するのである。法寶は佛陀の說法を諳誦して受持し、又結集して貝葉に寫して受持す、黃卷赤軸を法寶となすと云ふて、支那に入りては卷軸書冊の經典として大藏經と稱せられ、世に住まりて利益盡きざるのである。僧寶とは佛弟子の遺敎を奉じて化導に從ふ先覺者であつて、正像末に佛寶、法寶の正義を光顯する敎授の善知識を指すのであります。

我が宗義上に於きましては、本佛釋尊の木像、畫像、字像等が實在の本佛に代はりて信仰の依止と成る、是れが則ち佛寶であつて、又結要妙法の文字は敎法王として歸敬の依止と成る、是れが則ち法寶である。又た本化の再身たる上人が佛敎統一の大化導を起し、世出一貫信智統一の妙行を示し給ひて、末法萬年敎授の大導師と成り給へるは、是れが則ち僧寶である、この本佛の釋尊と、結要の妙法と、本化の上人との三寶を奉じて正化を起すものも亦住持の僧寶であれば、即ち正師先哲等皆僧寶であります。本佛の名字若しくは形像と、妙法の文字若しくは音聲と、上人と敎授の知識とが、世に住まりて利益が末世に沾ふと云ふが住持の三寶である。されどこの佛寶に於て、佛陀の實在を認ひる信仰と、之を認めざる信仰とに由りて、こゝに住持

の佛寶に對する信仰の意識と力とに大なる相違を生ずるのである、佛陀の實在を認めざる者には、泥龕塑像が唯一の依止なれども、佛陀の實在を認めて信敬する者には、この住持の佛寶のみが唯一の依止てはなくして、却つて實在の佛陀が根本の依止となり、而してこの實在の佛陀に對する信念を佛名形像の上に持ち來りて、本体と表象の關係を離さずしてそこに適當の信念を捧ぐるのである。又住持の法寶たる妙法の文字音聲は、佛在世に於ける說法敎化の結晶なれば、則ち佛陀の妙化の力であつて、その說法敎化の內容は理法と果法との二に於て、理法には果法の力なくして、果法にはこの理法を包有するのであるから、之を取りて果分の妙法と云ふので、その果法とは理と智と悲との冥合せる慈悲であつて、又この慈悲に功德力用が備つて居る、この理…智…悲…功德…力用、之を一括して佛力と云ふのであるから、この佛力を文字音聲の住持の法寶の本質と心得て信仰するのと、何等の意識なく單に文字音聲を神秘的に崇拜するのとは、大なる相違がある。それは功德利益に相違があるのみではない、その信仰の上に光も力も顯はれて來ないのである、渴仰の泉は涸れ歡喜の花は萎める形式的の信仰に外ならぬ、蛙鳴蟬噪に均しき讀經唱題と妄念幻想に類する遊滯せる思想とを指して信仰と云ふに過ぎないてあらう。之に反して妙法の文字音聲の包籠する所は、佛在世には佛口より發する微妙の敎化にして、その敎化は佛陀の意輪に於ける理智悲功德力用の薰發する所なるを知りこの佛力が妙法の音聲文字に包有せられて、我れ等有相信行の幼稚の前に、住持の法寶として遺付し給ひたるを信知し、我父良醫の今留めて此に在くと宣し給ひつる大慈の活力を感受し、この佛陀に對する渴仰の上に、そこに住持の法寶として現在せる妙法の文字音聲を信敬すれば、この意識ある信仰の上には功德利益の勝ぐるるのは言ふまでもなく、現實にその信仰には生氣を得て渴仰の泉は滾々として溢ふれ歡喜の園は清光に滿つるてあらう。又僧寶に就いても、本化の大薩埵と、その再身の日蓮上人を本質として、已後及び今日の僧寶は、若しも此の本質たる僧寶の指敎正義に違背する者は、其名は本化の沙門たりとも、その形は剃髮染衣たりとも、鄙敬するに足らずと、斯かる意識を有つて居る信仰と、之を有たずして、只形式の僧寶に歸敬し、形骸の殿堂に集まる者との信仰の力の相違、渴仰の光の差異は、實に睹易きことてあらうと思ふ

住持の三寶は、有相信行の上に尤も大切のことてあると同時に、精神の亡びて形式に流れ、而して無意義無意識の力なく光なき信仰を取るが如きことなきやう、住持の三寶は本体の三寶と不離なることを意識せしめて、そこに光明あり活力ある信仰を敎ふるか、三寶式の敎義に於ける尤も緊要の義門てある。若しもこの義門を消釋することが出來ぬならば、今後敎導の任に堪ふることは覺束ないと思ふ

聖語

佛滅後二千餘年三朝の間數萬の寺寺之れあり然りと雖も本門の敎主の寺塔と地涌千界の菩薩の別に授與し給ふ所の妙法蓮華經の五字未だ之を弘通せず(錄三六七)

八、行法篇　2　信仰

佛敎の統一的信仰（承前）

本多日生講演
增田聖道速記

宗敎的生活には、道德的生活は包まれて居ります。宗敎は道德を奬勵すると同時に、その歡陷を補ふものてある。それは道德的生活には未だ理性の滿足が得られませんで、又精神の安慰が欠けて居る、罪の消滅が認められぬ、實在の欲求を充たすことが出來ぬ。然るに宗敎的生活はこの歡陷を補ふて、道德の生活と併せてそれ已上の幸福平和の生涯を送くることが得られるのてあります

この動物的生活、道德的生活、宗敎的生活は、之を譬へて見ますれば、放蕩息子の生活と、奉公人の生活と圓滿なる家庭の生活との樣なものてあります

動物的の生活は、放蕩息子の樣に人類の責任を解せないのてあります、人は自己の快樂幸福を得んとするは斥け難きことてありますが、然しながらこの快樂幸福

に就いても下等なる動物的の劣情のみを求めずして、高等なる感情を養はねばならぬ、猶又自己の快樂や幸福に直接の關係なき場合にも、人たる責任として盡さねばならぬことがあります、則ち子としては父母に對して孝養を盡すべき責任がある、國民としては國家にも君主にも盡すべき責任がある、人類としては世界の人道正義に對して盡さねばならぬ、兄弟姉妹の間にも朋友知己の間にも、主從子弟の間にも皆責任を負ふて居る、猶大にしては自然界に對しても、その自然界を支配し給ふ諸法の王たる佛陀に對しても責任を自覺せねばならぬ、この尊とき性情が發揮せられずして、只劣情を充たすことにのみ心を奪はれて、人生を送くり居る人は、之を放蕩息子の心理と比するに能く似て居ると思ふ、縱しその身は富み貴くとも、學あり識ありとも、地位あり權威ありとも、責任の觀念なき生活は一樣に動物的生活に屬する尤も卑むべき人であります道德的生活は、奉公人の生活の樣に極めて窮窟であつて又不安の生活であります、奉公人は種々なる家憲に縛せられ、氣六ケ敷主人のために役々として動くも、決して温かき家庭に住むが如の安慰を有たぬ、彼の道德的の生活は克己とか、自制とかを峻嚴に責むるのみであつて、そこに温かき慰安を與ふることが出來ぬ。彼の快樂主義の道德說とか、個人主義の道德說は則ちこの道德生活の窮屈不安に反抗して起つて來たのであるかと思ふ、されど到底道德論の立場としての快樂主義や個人主義は、採用すべき價値あるものでない、若しも道德論の基礎に欠陷ありと知らば、進んで宗教的基礎に登りて之を匡救するより外なはいのである。それは人類已上の光を認めず、又人生生涯の外に、過去の生涯、未來の生涯あることを認めなければ、これ等の缺陷を補ふて、眞實の慰安と平和とを與ふることの出來るものではない、これ宗教が古今東西に最大の力を有する所以であります

宗教的生活は、圓滿なる家庭の生活の樣に、其處に尊敬すべき父兄ありてその行爲の督勵を受け、其處に信頼すべき父母ありて愛護の力を得、其處に親愛すべき

弟妹ありて、指導し啓發し助力するを得、又温情掬すべきの妻、一笑憂愁を解くの子ありて、節制あり、責任あり、信頼あり、趣味あり、破闇の光、奮鬪の力、一も備はらざるはなしと云ふ有樣である、これが宗教的生活と能く一致して居る、眞に圓滿なる家庭は、大宇宙の一小縮寫であります。斯くの如く宗教的生活は不安の念、窮屈の思なくして、而も道あり、義あり、愛あり、光ある生活である、滿足の生活、平和の生活意義ある生活を與ふるものは、實に宗教の力であります

この三種の生活を比較して、我が取るべきは何れであるかと考へたならば、誰も放蕩息子の生活や、奉公人の生活は望むものはあるまい、必ず圓滿なる家庭の生涯を送くるでありませう

元來吾人は劣等なる欲望に縛せられ、そこに熱惱を生じて墮落するのであります、故にこの熱惱を冷やすために宗教の最大の欲求を起さしめて、反省の力を與へねばなりません、腐敗せんとする物に熱を與ふれば、ますます腐敗を增す次第である、火を消さんとして乾草を投げてはならぬ、醉へる者に酒を與へてはならぬ、佛教は徹底制欲主義でありませんが、熱惱を醫するためには、消極的の教訓を翫味せねばなりません、年が年中營々役々として劣情を充たさんとする者は、却つて熱惱のために安息が得られない、されば每に宗教の教を聞き、その渴仰の心によりてこの人生の煩悶熱惱を冷やすことは、精神修養上缺くべからざると同時に、又身体の健康を維持するにも、家業の隆盛を計るにも、家庭の平和を望むにも、其他百般の上に多大なる効果あることを知らねばならぬ

已上は宗教の必要に就いて概論したのであるが、之より佛教の內容に入りて、少しく述べて見やうと思ふ

佛教には先づ發心を要するのであります、發心には種々の方面がありますが、何れにしても不滅の光と力とを渴仰するより起るのであります、博覽會に行つて見ると高價な美術品などが陳列されてありますが、然し何れも價格が附いてある、金錢さへあれば誰にても買

ひ取ることが出來る、然るに宗教に云ふ光なり力は金錢に依つては得られない、即ち發心に依つて始めて得らるゝのであります。人には種々の希望があつて、それが光となり力となつて生きもし活動もして居るのでありますが、若しもこの希望を失はしめ、又希望の悅びを失はしめたならば、その人は如何に人生の寂寞を感ずるで有りませうか、恐らくその人は生氣を失ひ活氣を奪はれるでせう、然るに一死萬望を葬むると申して、死は吾人の總べての希望を破壞する者であります故に一たび死の問題に想到して而して眞面目に一死萬望を葬むる有樣を吟味するならば、如何にも悽慘のことであると感ずるであらう。されば死に對する解釋が何等かの意義に於て、會得せられ、信念せられて居らない人は、人生の眞の光と力とを維持することが出來ないのであります、眞の光と力とは、死を生捕つて死は幻影である、不滅は本件であると、信念するより來ることは爭へぬことゝ思ふ

死は蛇の皮を脫き去る如しとは、佛陀が涅槃の時に於ける慈敎である。死は演劇のトッタリの投げられて即時に起き立つが如に、人生の死は凡べて復活再生にあらざるものはない、死を永遠の亡びと思ふは大なる病見てある。この樣の御敎が確かに信じられて、始めてそこに發心が出て來るので、即ち同時に無限の光と力とが、我に得らるゝのであります。日蓮上人が龍の口に首刎られんとし玉ひし時に、これほどの喜びを笑へよかしと仰せ玉ひしも、臭き頭を法華經にさゝげて金色の如來となるは沙を以て黃金に替ふるが如しと仰せ玉ひしも、畢竟死を生捕つて、死に對し何等恐れなき安心を表白し給ひしに外ならぬと思ふ。この死を生捕ることが、非常に六ケ敷ことであつて偉人でなければ出來ぬと思ふは間違ひである、婆さんでも娘でも、眞の發心よりせる信仰を得て居る人は、皆この境界に到つて居ります、私の實驗した信徒にも幾人もあります。彼の中江氏が剛毅の人であるにも拘はらず、死の際に安からぬ風であつたのは、靈現滅亡の說では安心がてきないからだと思ふ、只安心がてきないばかりでない、

靈魂滅亡の見解を有て居るものは、社會の進歩向上を害すること尠なからぬのである、宇宙間尤も尊とき吾人の靈の力を亡ぶるものとするは、宇宙の破滅を見るよりも尙ほ恐るべきことである、世の中の事詐り多く遷り變はるものなれど、この吾人の本体は不滅なり、佛性は常住なりとの信念は、長へに光ある眞理であります。さて人の心に確實に印象を與へたものは、金力や權力を以て奪ふことの出來るものでない、このコップをコップなりと印象したる時は、百萬圓やるから土瓶と思へ、若しも土瓶と思へぬなら首を刎ねると云はれても、心の內にコップと信じたことは除かれるものでない、その如に意識ある發心が確實に起つて、我れは永遠に亡びぬ本体あり即ち佛性を有す、又宇宙には無限の力ある佛ましまして救を與へ給ふと、信念するならば、この信仰は金力や權力によりて奪はるべきものでない。發心とはこの確乎不拔の力を帶びて起りたる宗敎心を指すので、この發心覺醒がなければ佛敎徒となることは出來ませぬ

發心の次に來るべきは何かと云ふに、即ち信仰的の生活であります、宗敎發心の力は人をして幸福の生活に入らしめ、光あり力ある平和の境界に住まらしむるのである

我れ等が發心には二個の要義があつて、無限の力ある佛陀の護りと、我が佛性との二つを信ずるので、この信念は人生の如何なる不平をも拂ひ、又如何なる困難にも耐へ、又凡ての幸福を生み來る力となります

如來の室とは、一切衆生の中の大慈悲心是れなり

と說き給へば、佛陀と吾人との交通は、我が心に慈悲心を起す時、そこに佛は來り給ひ我が心は佛に接觸するので、我が主觀の佛性と、客觀實在の佛陀とは、この我が慈悲心の室宅に於て相交はるのであります。この時は直ちに不滅の本体が呼び醒まされて居るのである、この慈悲の心が我が生活の光となり力となり、又社會の光となり力となるのであります

さてこの客觀的に實在し給ふ佛とは如何なる佛かと云ふに、之に就いて佛敎徒に三種の見樣があると思ふ。

一には、諸佛散漫の思想であつて、多數の諸佛に何等の統一なくして、うの多數のなりに雜然漫然として之を奉戴するので、之を諸佛主義とでも名ければ宜いと思ふ、普通佛教徒と字なする者は、この主義に屬すべきである。二には、一佛偏崇の思想であつて、これは諸佛の中より任意に、若しくは少しの事由に依つて、單に一佛を取りて偏崇するので、諸佛とうの一佛との關係が解決せられてない、隨つて斯樣にして一佛偏崇の者が續出するから、そこに却つてうの偏崇する一佛と一佛とが澤山に出て來て、紛亂雜多の對象となるのであります。彼の大日を取り、彌陀を取り、藥師を取る樣の類は、即ちこの思想であります、釋尊を奉ずるものでも多くはこの思想を出てぬと思ふ、之が佛教各宗對立の主義であります。三には、統一本佛の思想であつて、これは丁度前二者の欠點を補ふて居るのである、即ち諸佛思想と一佛思想との開顯である、諸佛を捨てず一佛を偏崇せず、而して善く諸佛に統一あることを明かして、その統一の本佛を釋迦佛の上に据ゑたのであります。之を法華經の本迹觀の本佛と云ふので、本佛は天の一月、迹佛は萬水に浮べる影也と、日蓮上人の教へ給ひしは即ちこれであります

この統一の本佛にてまします我が釋迦牟尼佛は、智慧あり、慈悲あり、功德あり、神力ありて、善く三世に十方に化益を與へ給ひ、曾て暫くも廢し給はず、佛教徒とはこの佛陀の智慧を渴仰し、慈悲を渴仰し、功德を渴仰し、神力を渴仰する集團であります。若しもこの釋尊の力を疑ひ、慈悲を疑ふならば、之は正しく反釋迦教の思想である、即ち叛逆思想であつて、所謂謗法罪の最大元惡である

元來彌陀の四十八願にもせよ、藥師の十二願にもせよ、其他諸佛各々の行願にもせよ、これ等は皆釋迦佛の思想界を通ふして顯はれたものであつて、釋尊の意輪に於ける智悲海中の波動に過ぎないのである。佛教徒が如何なる經典を拜して、如何なる渴仰を起しても、その源泉の歸着とは之を本佛釋尊の上に認めねばならぬ、時に或は經典過信の爲めに釋尊を忘れ、時に或は

他佛の名に於て釋尊を忘れ、時に或は眞理とか觀念とかの思索に醉ふて釋尊を忘れ、其他種々の思想に依りて釋尊を忘るゝものがある、これ等は何れも正信正道を誤りたるものであります。本佛釋尊は諸法の王なり、法はこの佛に由りて運用せられ、諸佛はこの佛に由りて應現せしもの又は救濟せられしもの、諸經はこの佛に由りて宣示せられたに過ぎない。本佛釋尊は、三寶の中の中心、信行唯一の依止處、歸敬處であります

（已下次續）

日什上人置文諷誦章講義

八十三老比丘　阪本日桓講演

第三十回

若然者日妙聖人酬一乘所修之惠業一者開、一實菩提之覺華、答題目五字之勝業一者詠、五智圓滿之覺月、文此の本文の若然といふ文より去つて本文の終の法界平等利益といふ文までの十三句七十三字は回向の功德を述歎したる文で有ます此の十三句七十三字は大に分つて兩段初め若然の下の五句四十一字は別して日妙聖人の得三菩提の爲に回向す次に七世の下七句三十二字は總して法界の有緣無緣の二類の衆生の得三菩提の爲に回向す又た初の若然の下別して日妙聖人へ回向する文の中に於て亦た分つて二つ初の若然の一句七字は所回向の人を擧げ二に酬一乘の下の四句三十五字は能回向の法を明す此の四句三十五字の文の中に亦た分つて二つ初の酬一乘の下の二句十七字は開迹顯本の法華經眞の一部略の方便品壽量品要の十如是自我偈の經法を以て回向す此の回向の文に更に分つて亦た二つ初の一句九字は所修の廣略要の經法を明し二に開一實の下の一句八字は得益を明す二に答題目の下の二句十七字は要中の要の五字の題目を以て回向す此の文更に分つて亦た二つ初の一句九字は所修の題目を擧げ二に詠五智の下の一句八字は得益を明す己上分科を辨じたて有ます是より隨文消尺しまする○若然者の此の三字は簡ひの辭にて本文の最初に所謂

奉ニ圓繪一大曼荼羅一幅といふ文より去つて佛力法力合力尊靈ノ增進無レ疑の文迄てが都て所修の善根の法て有ます依て今爰に於て簡ひあげて若然者前に修する所の開迹顯本の法華經廣略要の經力及び要の中の肝要たる所修の題目の功德に酬て成佛得說するのて有ると簡ひ擧げたる辭て有ます○酬一乘文 此の一乘の文字は如來の一代所說の大乘に亘り華嚴にも圓の一乘が有るけれども衆別の過が有ります方等にも圓の一乘が有るなれども對藏通別の過が有り般若にも圓の一乘が有るけれども帶通別の過が有り法華經迹門にも圓の一乘が有るけれども開迹顯本不說の不調法が有り涅槃經の圓の一乘は扶律談常の不調法が有り無量義經の圓の一乘には從多歸一不說の無調法が有り普賢觀經の圓の一乘には無作三身即一應身常住不說の不調法が有つて悉皆有名無實の一乘にして眞の唯一佛乘にあらず獨り開迹顯本一部階本の法華經のみ第二番の成道已來中間今日に至るまての一切權迹の人法を開して實本の人法を顯說したる眞の唯一佛乘と說て有ます今の諷誦章の酬一乘の一乘とは開迹顯本の法華經を指して一乘と御書になつたのて有ます○所修とは修行する所の一乘の法なり惠業とは本佛釋尊の平等大惠の作業の加被力によつて正直に爾前迹門の方便の權教を簡ひ捨て唯一佛乘の開迹顯本の法華經の廣略要の經文を簡ひ取りて受持し讀誦し解說し書寫して得三菩提の追善に備へたるは平等大惠の作業なれは惠業と御書になつたのて有ます是に反するは愚癡の作業にして不得菩提の追惡に擬したる者て有ます又た一義には惠業とは仁惠の作業にて開祖は弟子の日妙の苗にして秀て秀てゝいまだ實のらずして夭死したるを憐れみ開迹顯本一乘の法華經を以て得三菩提の追福に備へたる仁惠の作業によつて得三菩提の安樂の佛身を得たるを惠業と申すのて有ます○開二一實菩提ノ之覺華一文 此の一句七字は日妙聖人の得益を擧げたる文て有ます此の一句七字は法體交へて釋し一實菩提とは法なり覺華を開くは體を擧げたのて有ます一實とは一乘眞實の經と云ふことなり所謂開迹顯本の法華經を一乘

眞實の經といふ是を一實と申す菩提とは三菩提とて實相菩提是れは事法身如來の事て有ます實智菩提是れは智報身如來の事て有升方便菩提是れは慈悲應身如來の事て有ます開覺花とは覺とは本覺にて花とは妙法蓮花なり所レ謂所修の開迹顯本一乘眞實 法花經の功德に酬て日妙聖人本具の妙法蓮花の本覺無作三身即一の佛因の妙花が開きたりといふ事なり○答二題目五字ノ之勝業一者文 此の一句九字は所修の信念口唱の題目の功德を歎釋したる文て有ます法花經迹門の題目は理の一念三千の廣博の法門の總名て法花經本門の題目は事の一念三千の廣博の法門の都名て今此の題目は本門壽量品の題目て有ます此の題目に就ては七種の立題とて七通の題目の立て方の有る事は上にて略して辯じた通りて有ます今此の題目は法體兼擧して立てたる題目て妙法の二字は法なり蓮花の二字は體を擧たのて有ます何の所以て法體を兼ね擧て立てたるぞと云ふに妙法は不可思議にして知るべからず依て世間の蓮花を以て體れば知り易き故に法體を並べ擧て立てたるて有ます又た一切衆生本具の當躰の蓮花に約すれば單法の題目て有ます此の二種の立題の中には本宗の正意の立題は當躰蓮華に約し單法の題目が正意て有ます此の事を委しく知らんとおもはゞ祖書錄內廿三卷當躰義抄を拜讀なされよ○詠二五智圓滿之覺月一文 此の一句八字は妙覺果滿の佛躰を證得したる事を述歎した文て有ます此句も法體交々擧て御書になつたのて有ます五智の二字は法なり圓滿の二字は法體兼含して釋し佛果圓滿の時は法となり月の圓滿に約すれば體となります覺月を詠んの覺の一字は本覺の覺の字て法に約したる語て詠月の二字は體て有ます此の文を消釋しますれば五智と申す妙覺果滿の佛の所證の智惠て有ます一には法界清淨智二には大圓鏡智三には妙觀察智四には平等性智五には成所作智是れを五智と申します此の五智を圓滿具足したるを妙覺圓滿の佛といふのて有ます詠覺月の三字は無作三身即一の本覺の佛を覺と申し月とは三五圓滿の月て五智圓滿の本覺の佛を三五圓滿の月に體て覺月と云たのて有ます詠とはながめたのしむ事て五智圓滿の佛は自

受法樂とて自ら所證の妙法の樂を受くるを詠と申すのてあります偖て此の讃頌章に信念口唱の題目の殊勝の作業の功德に答ては五智圓滿の本覺の月を自受法樂すと御書になつて題目の五字を以て五智に配當して釋したるは一往配當したるのて實は此の題目の五字には本因本果の功德を備へたるのて有ます宗祖は釋尊の因行果德の二法は妙法の五字に具足すと仰せられたれば因位の萬善果上の萬德が妙法の五字に具足して有ます然るに題目の五字を單に果智に配當したるは一往の配當て有ます此の五智を錄外十四卷冊色心二法御書に五智を五佛に配當したるも是れもまた一往の配當て有ます其他五方五藏等に配當したる事が有ます往見

（附言）永々連載し來りたる本講義も、次の一回を以て完結す

聖語

日本國一時に信ずる事あるべし、その時は、我は本より信じたり信じたりと申す人こそ、おほくをはせんずらめ、とれば

十法界抄講義

八十三老比丘　坂本日桓講演

第五回

從答雖有執難至即不稱理也　此の冊六行五字は大に分て四段て有ます初めの答雖有執難と云ふより色身菩薩と云ふ文に至る七行二字は惣して一代所說の聖敎は皆な當機得益有る事を答へ○二に縱不修一心と云ふより釋彼士得聞と云ふ文に至る十六行七字は別して二乘の得益有る事を答へ○三に又於爾前と云ふより下八行七字は三敎の菩薩當分の得益有る事を答へ四に但至小乘と云ふより即不稱理に至る四行三字は當家の問難を會通して答へたる文て有る是れは之れ答の文の大科て有ます其細科の文は隨文消釋の時に分文して聽せます

答雖有執難其義不可也　文　此の二句九字は都て當家より難問したる義の不可なる事を斥はれたる文て有ます此文の意を請すれは問者に於ては法華本門の

一經のみに執著して其他の諸經を皆な無得道なりと難問有ると雖とも其問難の義は都て不可なる者也と抑斥したる文て有ます偖て問者は答者を賞揚し答者は問者を抑斥したる其爲行を見れば問者の學識德行の優なるを答者の之れに反するを知るに足る嗚乎天下に敢なき者也

所以如來說敎備機不虛是以頓等四敎藏等四敎爲八機所設非無得益　文　此の文の六句廿九字は如來一代の聖敎は皆實不虛にして皆な當機益物有る事を答へたる文て有ます今此の文を請じて聽せますれば一代聖敎に皆な得益有る所以は法華經壽量品に爲度衆生皆實不虛と說て衆機に備わり叶ふて虛しからざる者也と說けり是を以て化儀の四敎に約して論ずれば秘密の機には秘密敎を說き頓機には頓敎を說き漸機には漸敎を說き不定の機には不定敎を說き化法の四敎に約して論ずれば小乘の機には三藏敎を說き通機には通敎を說き別機には別敎を說き圓機には圓敎を說て化儀化法の此の八機に應じて施設したる所の敎法に無得益なる法の有るべき道理なし何が故に猥に法華經本門に執着して都て他敎を無得道と非するは猶り何ぞや故に無量義經に是ノ故ニ衆生得道差別と說れたり誠に知りぬ無量義經に終ニ不レ得レ成ニ無上菩提一と說きたれども而も藏通二敎には四諦十二因緣六度此の三法と須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果此の四果の得益が有り又た別圓二敎に約すれば圓の成佛は速疾頓成の得益別の成佛は歷劫迂廻の得益にて此の不同ある耳なり都て爾前の聖敎に是れ一向得道なきに非ざる也と答へたる文也○是ノ故ニ或ハ有ニ三明六通一或ハ有ニ普現色身ノ菩薩一　文　此の二句十六字は上の答の文を結成したる文て有ます此の文を請すれば是の故に三藏敎通敎の二敎には阿羅漢の人が宿命明と天眼明と漏盡明と云ふ三明と天眼通天耳通宿命明通身如意通知他心通漏盡通と申す六通此の三明六通の得益が有ます別敎圓敎の二敎には普現色身とて昔く十界の色身を現して一切衆生を濟度する菩薩が有り所謂觀音の冊三身妙音の冊四身等の菩薩の如き是れなりと答へたる文て有ます

縱不修一心三觀以斷同體二惑以折智斷見思何不出二十五有是故解釋云若遇衆生令修小乘我則墮慳貪此事爲不可祇出二十五有已當知雖說此事爲不可而有出界但是不觀不思議空故雖不顯不思議空智何不起於小分空解文此の十五句九十六字は答者が道理を立て二乘の得益有る事を述べたる文て有ます此の文を講ずれば二乘の人縱ひ法花迹門の觀心の如く一心三觀の智を以て一心三諦の境を觀して同躰の三惑を斷じ中道法性の妙理を證得せずといへども（同躰の三惑と云ふは無明の惑は躰にて見思塵沙の煩惱は用で躰より出たる明なれば法躰は同一なる故に同躰と申す）既に折空觀の智を以て一極微色一刹那心に至るまて色身を折破して見思の煩惱を斷じたるに何ぞ四州四惑越六欲梵天四禪四空處無想那含の此の二十五有の生死を出離せざらんや是の故に法花文句四の卷の解釋に云く若し遇衆生令修小乘我則墮慳貪此の事爲不可祇出二十五有已上當知雖說此事爲不可而有出界但是不觀不思議空故雖不顯不思議空智何不起於小分空解文此の十五句九十六字は答者が道理を立て二乘の得益有る事を述べたる文て有ます此の文を講ずれば二乘の人縱ひ法花迹門の觀心の如く一心三觀の智を以て一心三諦の境を觀して同躰の三惑を斷じ中道法性の妙理を證得せずといへども（同躰の三惑と云ふは無明の惑は躰にて見思塵沙の煩惱は用で躰より出たる明なれば法躰は同一なる故に同躰と申す）既に折空觀の智を以て一極微色一刹那心に至るまて色身を折破して見思の煩惱を斷じたるに何ぞ四州四惑越六欲梵天四禪四空處無想那含の此の二十五有の生死を出離せざらんや是の故に法花文句四の卷の解釋に云く若し遇衆生令修小乘我則墮慳貪此の事爲不可祇出二十五有已上問者當に知るべし經には衆生に遇て小乘を修せしめたる我れは慳貪に墮て法を悋みたるは不可なれども而も二乘をして廿五有の生死をば出離せしめたり但し是れ大乘不可思議の中道第一義空を觀せざるが故に不可思議の中道第一義空の妙智を顯さずといへども小乘分齊の眞空の智慧を起して見思の煩惱を斷じ二十五有を出てたりと答へたる文て有ます○若し云下以空智不斷見思者非下開善ノ同中無聲聞ノ義文此の二句十八字は古師の曲解を引て問者を破斥したる文て有ます此の文の意は今問者に質問すべし若し二乘が眞空の觀智を以て見思の煩惱を斷せず三界の生死を出離せずと云ふならば聲聞の人はなかるべし然すれば問者は開善師の所立の無聲聞の曲解の義に同するてはなきか如何と質問したる文て有ます

○況今經者正直捨權純圓一實之說舉諸爾前聲聞得益說諸漏已盡無復煩惱又云實得阿羅漢若不信此法無有是處又說過三百由旬化作一城若諸聲聞全同凡夫者五百由旬一步不可行又云自於所得功

德生滅度想當入涅槃我於餘國作佛更有異名是人雖生滅度之想入於涅槃而於彼土求佛智惠得聞是經已此文既見證果羅漢不來法華座入無餘涅槃生方便土聞說法華若爾者既生方便土何不斷見思是故天台妙樂釋彼土得聞文此の十行四字の文は二乘の人の當分の得益有る事を答へたる文なり偖て此の文を講ずれば況や問者が所依の法華經は正直に方便の權教を捨て純圓一實の妙法を說きたる經なれども諸の爾前の聲聞の得益を擧て三界八十八使の見惑と十使の思惑の諸漏を已に斷盡して復た煩惱無きと說き又法華經に實に阿羅漢果を得たる者が此の妙法を信せざると云は是の處り有る事なしと云ふ又法華經に欲界色界無色界の三百由旬の險難の路を經過して一城を化作し此の化城に止宿せりと說れたり若し無復煩惱の二乘實得阿羅漢の人過三百由旬の人々が若し全く凡夫と同樣とならば五百由旬の道程一步も行かざる者也何が故に經に過三百由旬と說きたるや（五百由旬の配當には三種あり一は生死に約すれば三界を三百由旬とし方便土を四百由旬とし實報土を一百由旬となす二に煩惱に約すれば見惑と五上分と五下分の思惑を三百由旬とし塵沙を四百由旬とし無明を五百由旬とし三に觀心の智に約すれば空觀の智は三百由旬を知り假觀の智は四百由旬を知る中道觀は五百由旬を知る已上此觀の七の卷の一に出たり）又た法華經に云く爾前に於て阿羅漢果を得たる者自ら所得の眞空の功德に於て成佛したる想を生じ灰身滅智して今世釋尊所說の法華經の會座に來らざれども方便土に生れて法華經を說くを聞て成佛得脫すと云ふ若し爾らは既に界外方便土に生る何ぞ見思を斷せずと云ふや是の故に天台妙樂の二大師に於ても經の現文は佛滅後の二乘が滅度の想を生し灰身滅智したる者に約して彼土得聞と說きたれども其義歎の同じきを以て佛在世の二乘に約して彼土得聞の文を釋したる事が有ります然れば則ち二乘が爾前に於て當分の得益有る事は經釋に分明に說れたり何ぞ得益なしと云ふやと答へたる文なり○又於爾前菩薩說始見我身聞我所說即皆信受入如來惠故知爾前諸菩薩斷除三惑入於佛惠故解釋云初後佛惠圓頓義齊已或云故擧

始終意在佛惠矣若此等說相經釋共非義正直捨權之說唯以一大事之文妙法華經皆是眞實之證誠皆以無益也皆是眞實言者豈非亘一部八卷乎釋迦多寶十方分身之舌相至梵天神力三世諸佛誠諦不虛之證誠空同泡沫（文）此の八行七字は爾前の菩薩に得益有る事を答へたる文なり偖此の文を請ずれば問者は爾前の菩薩に當分の得益なしと難じたれども問者が所依の法花經には寂滅道場の華嚴會の時に始めて盧舍那報身の我身を見我が所說の圓頓の教を聞て即ち皆一同に此の妙法を信受して初住已上の如來惠に入て斷無明證中道の悟を得たりと說れたり故に知れよ爾前の諸の菩薩が三惑を斷除して初住已上の佛惠の位に登りたるにあらずや故に解釋に云（法花玄義十の卷の文）初の華嚴經所說の佛惠も後の法華經所說の佛惠も速疾頓成の圓頓の妙義は齊等也と釋し或は云く（釋籤一の卷本の文なり）故に始の華嚴經と終の法華經の二經を擧げたる事は意は二經の佛惠の齊等なるを顯する有るなりと釋したり矣若し此等の說相の經文釋義が非義ならば正直に方便の權教を捨てたりと說き又法華經と申す唯以一大事の因緣のある故に世に出現したりと說き又妙法蓮華經皆是眞實と證誠したる文も皆な無益で有る也多寶如來が妙法蓮華經皆是眞實の言は豈法華經本迹二門一部八卷廿八品に亘るに非ずや所以は多寶の證明は證前と起後との二重の證明が有ます依て法華經一部に亘り菩薩の得益を說て有るてはなき乎若し强て爾前には菩薩の得益なしと云は釋迦佛の正直捨方便の說も多寶如來の妙法蓮華經皆是眞實の證明も十方分身の諸佛の舌相至梵天の神力も三世諸佛の誠諦不虛の證誠も（此の三段諸佛の二句十一字の文は方便品の五誠諦不虛妄の下の文を引て判じたる有る）空しく泡沫に同し消滅したるてはなきと答へたる文で有ます○但至小乘斷常二見者且對大乘以小乘同外道非無小益也（文）此の四句廿四字は二乘が外道の斷常の二見に陷りたる問難を會通し答へたる文で有ます偖此の文の意を請じますれば向きに問者が種々の問難の中に但し小乘の人が

外道の斷常の二見に陷りたりと申されたるが夫れは且く大乘の菩薩の煩惱即菩提生死即涅槃と躰達して灰身滅智せざる不斷煩惱不離五欲の人に對し灰身滅智したる小乘の二乘を外道に例同したる者で有ます二乘の人が爾前當分の得益がなきと云ふ義では有ませんと會通し答へたる文で有ます○又七方便並非究竟滅釋或復但言觀心即不稱理者又是對於圓實大益下七方便益釋並非究竟滅即不稱理也（文）此の八句四十五字は問者が天台妙樂の釋を引て難じたるを會通し答へたる文で有ます次に此の文の意を辨明すれば問者が天台の文句の七方便並非究竟滅の文と妙樂の弘決の但言觀心即不稱理の文を引て人天二乘も三教の菩薩も爾前に於ては當分の得益なしと難したるが又た是れも純圓一實の法華經の大利益に對して一往人天二乘三教の菩薩の得益を抑下して並非究竟滅とも即不稱理とも釋した者で有ます全く七方便の輩が爾前當分の利益なしと云ふてはありませんと會通し答へたる文で有ます當應て第三重の問答の文を講じ畢りましたから次應よりは第四重難の文を講じて聽せます此の四重の難に至て始て宗祖靈山別付の本意を宣示顯說したる大事の法門で有ます

質疑應答

一記者

在名古屋なる家田仙三氏より本國寺左の質疑を申越されたるか、本誌讀者中には同じ疑問を懷かるゝ向もあらんと思ひ、誌上にて答辯するこゝとなして左に掲載す

（質疑）自分は是迄父の代より一致派に有之候處五六年以前より貴派の統一を拜讀仕り候て大に感じ父の代より御勸請申上候木像三寶樣始め鬼子母神妙見大菩薩最上位樣等其他御札御守に至る迄悉皆相廢し更に佐渡始顯の御本尊を妙宗より相願御勸請仕り自分檀那寺を組斷り居り候處今回名古屋へ移轉し貴派の檀家に相成度同市寺町の貴派の御寺を御尋ね申し本堂へ參詣仕候處依然舊式に有之候（中略）俗家は改正なして御寺は依然舊式か御主意なるか伺度云云

(應答)御質疑の趣意は大体に於て吾宗の立義を誤解せられて居らるゝ事と存じます、我宗に於きましては、雜亂勸請と申して、本門の本尊以外の神佛を勸請するのは罪惡として嚴禁致しますが、木像畫像の本尊を勸請することは敢て禁止は致しません、我宗の立義は

一本尊として勸請するは本門の本尊に限る

一本門の本尊は其本尊としての要件を具備する限り木像畫像畫像何れにても差支なし

と云ふのでありまして、本門の本尊としての要件を具備して居りますれば、畫像であらうが、木像であらうが、佐渡始頭であらうが、弘安再治であらうが、何れを勸請しても差支はありません、要する處、勸請の許否は本門の本尊たる要件を具備するや否やにあります、貴君が雜亂勸請の非を悟り御親父の代より勸請してあつた妙見や稻荷を御廢しになつた御英斷は誠に感服の外はありません、法華宗徒一般も是非とも御同樣に捨邪歸正致しまする樣願ふのであります、が、それと同時に三寶樣も木像であるから廢して仕舞つたと申されてありますが、但に木像であつたと云ふ丈の理由で廢止するのは如何かと思ひます、從來の木像式が本門の本尊の要件が缺けて居つたから廢止したと申されれば御尤もの次第と申さねばなりませんが、後段質疑の趣意より見ますれば、但に木像と云ふ丈の理由と思はれます、それでありますと、私共から見ますと、それは却つて法華宗の教義を破壞するものと申さねばならぬことゝ思ひます、何故と申すと、法華宗に於きましては決して木像畫像の建立を否定は致しません、否定しない許りでなく此法門は諸經諸宗には無い法門で、法華宗の專賣物と申して宜しい法門であります、木畫二像の建立は法華經の一念三千の法門に依らざれば其意義が成立しないのであるから法華宗以外の諸宗が木畫二像の建立は其意義を欲いて居る、故に有名無實の木像畫像で、但木を刻み繪の具を塗りつけたと云ふに過きぬので、本尊として勸請する丈の意義がありません、法華宗には一念三千と云ふ法門があつて、國土の成佛、草木の成佛と云ふことを論ずるから、木畫

二像に其意義が具つて居りますから、始めて本尊として勸請し得べき價値が出て參るのであります、故に祖師聖人は、觀心本尊抄に

木畫ノ二像ニ於テハ外典内典共ニ之ヲ許シテ本尊トス、其義ニ於テハ天台一家ヨリ出タリ、草木ノ上ニ色心ノ因果ヲ置カズンバ木畫ノ二像ヲ本尊ト恃ミ奉ルコト無益ナリ

又、全抄に

發スル所、一念三千ノ佛種ニ非レバ有情ノ成佛木畫二像ノ本尊ハ有名無實ナリ

又、金吾釋迦佛供養抄ニ

此書木ニ魂魄ト申ス神ヲ入ル、事ハ法華經ノ力ナリ天台大師ノサトリナリ、此法門ハ衆生ニテ申セバ即身成佛トイハレ、畫木ニテ申セバ草木成佛ト申スナリ乃至此法門ハ前代ニナキ上、後代ニモ又アルベカラズ

其他木畫二像の事に就ては祖書中處々に御垂示がありまして、皆木畫二像建立の法門は一念三千の法門に依らずんば成立し難いこと明らかにせられてあります、右の次第故木畫二像の建立は法華宗でなければ其意味が分らぬ譯で、法華經の一念三千の法門を知らないで木像畫像を見たならば耶蘇教の所謂偶像と云ふものに外ならない、一念三千の法門を知つて初めて、佛教で木畫像を尊敬する意味が分るのであります、斯の如き法門なるが故に我宗に於きましては木像畫像を勸請するのは差支ないことに定まつて居ります、但木像は破損し易く莊嚴を缺く虞れあるを以て其邊の注意をヤカマシク申すのであります、又從來法華宗で普通三寶樣と申して居る處の木像即ち中央の寶塔と釋迦多寶二佛のみて前に祖師の御像を安置してあるものは本門の本尊の要件を缺いて居る故、それは具備したるものに致さねばならぬと申して居ります、本門の本尊の要件と申しますは、本門の三寶樣が具備せねばならぬことであります、本門の三寶樣とは、本法の御題目、本佛の釋尊、本僧の上行等の四菩薩、此三寶樣は是非揃はねばならぬのであります、其他の迹化の菩薩以下は存略

宜しきに隨つて一定しませんが、此三寶樣が揃つて居らんければ本門の本尊たる要件が具はらんことになつて、本門の本尊として認める譯には參りませんから、從來の普通の三寶樣の木像を否認するのであります、從來の木像にも四菩薩を造立して安置すれば差支はありません

我宗の立義は右の如く木像畫像を否認致しませんから從來雜亂勸請の改善に就ては吾宗管長より度々の訓令もありましたけれども木像廢止杯の訓令は嘗つて受けたことはありません故、末派の寺院は何れても皆木像を勸請して居ります、中には畫像の本尊を用ゐて居るものもありますが、是等は木像が惡いので廢したのではありません、何らでも差支ない故、其時の便宜に任せて畫像にし又は木像にするのでありますから、御質疑の如き寺院であるから舊式を許すと云ふ樣な譯ではありません、在家寺院共に畫像木像何れも許す次第であります、右にて御質疑の點は粗御說明申上たことゝ存じます

頁	行	誤	正
八	一三	聽感	感聽
一三	一三	「經」の字は五號活字の誤	
一四	一〇	錄、	、錄
一五	四	「なり」の下「(本尊抄、遺九四九)」を脫す	
一五	末	「經典」の二字不明のものあり	
一九		はざ	はらざ
二四	二	最下に「も」の字を脫せるもあり	
二五	一三	「文字」の下「音聲」の二字を脫せるもあり	
二六	四		
二八	一二	「勝見」の上は「劣謂」の二字なり	
三二	一二	(二	(錄二
三三	一四	緣	進
三三	一〇	「參」の字は衍	
三四	六	出世	世出
三五	七	「今」の下に「圖」の字を脫す	
	末	「輪」の上は「意」の字なり	
三六	一〇	ず	す
三七	一四	出世	世出
三八	一一	輪	論
三九	一一	佛陀	陀佛
四〇	二	この章目の五號活字なるは四號活字の誤	
	二	惠	慧

四二	一四	汎	凡
四五	一三	汎	凡
四九	九	この項目は一字下ぐべき誤	
五〇	八	「大」の下「本尊」の二字を脫せるもあり	
五一	一一	糸	系
五二	二	法	眞
	六	よ	(よ)
五三	五	「雲」の下は「鷲」の字なり	
五六	九	「思想」の下に「融通」の二字を脫せるもあり	
五七	九	取	得
五八	一	「て」は衍	
	一五	出世	世出
五九	八	決	神
	一四	の法	の佛
	一五	汎	凡

右の外句讀點の誤脫あるも略す

雜報

○寺院修營の美擧と災害　第五敎區千葉縣千葉郡曩田村高田常眞寺は去る五月十四日午後三時隣保石井某方出火の際、折柄の强風とて遂に本堂始め諸堂庫裏等悉皆類燒し、僅かに本尊聖敎のみを奉じて避難したりといふ、同寺は今を去る六十七年前火災に罹り二年の後堂宇諸建造物六棟を再築し、爾來六十年餘を經て大破に及びし故、現住職松本眞釋師これが修營を發起し檀徒一同奮勵して金四百圓許を投じ、去る二月中完く舊觀に復したるは、全く同寺檀徒の篤信と住職の敎化宜しきの致す所にて、其功勞表彰すべきものありしに、不幸今回の災厄に遭ひしは太だ惜むべし、されど同寺眞俗諸子よ、この災害に挫折せず益す勇猛精進して寺門の興復を計り、他日復び寺檀の模範となれよ、至嘱

○神戸敎況　神戸の布敎は十數年前現管長本多日生猊下が部下の鈴木諱學、吉田日梓の二師等と共に布敎の端緒を開かれしが、當時宗門の情勢は諸師をして永く同地に駐まらしめずなりたれば、播州印南郡神吉村妙信寺住職たりし上田智量師は挺身その後を引受けて神戸布敎に努められ、遂に自己の住職寺を他に讓りて同地に移住し、借宅を搆へて布敎所に充て、大に法鼓を鳴らしつゝ苦心經營毫も捨まざりしかば、茲に姫路市の熱誠家中村祐七君外二三信徒の同情を得て兩三年前より同地大開通六丁目に一の布敎所を新設するとなり、同師の奮鬪活動は次第に光を放ち來りて目下大に信徒を增殖し前途益す多望ならんとす、眞に宗敎の爲め社會の爲め慶すべき事と謂ふべし、蓋し神戸は布敎上必須の要地なれば、各宗敎の何れもが各々敎會を設置して孜々傳道に努めつゝある折柄、幸に本宗に在りては右上田智量師の熱烈なる宣敎が能く今日の狀態に

まて振興せられたるとは頗る稱賛に價するものなれば護法篤信の眞俗諸子は布教にまれ資財にまれ各自應分の援護を吝まず、爲法爲國大に同師の事業を翼賛ありて向後の大發展に資せんとこう望ましけれ

○夏期講習會　千葉縣茂原町に於て來る八月一日より向ふ十日間長生郡教育會の講習會開催せらるゝを好機として、豫て同地大成館中學校長千葉醫學士、日野文學士、安川前代議士、白井女學校長、其他知名の人士發起となりて組織されたる修養會と稱する團体に於て右教育會講習開期中五日間若くは七日間日蓮主義の夏期講習會を開催する豫定にて、仝地の小學校をその會場に充て、講師として本多日生師を請するととなり、已に出演の承諾を得たりといふ、思ふに古來宗門教學の中堅たりし千葉縣下に於ける催しなれば、定めて盛會なるべし

教學財團彙報

一、賛賛員中金壹圓以上の寄附者へは（義務住職又は團体にして會員外の分は除く）夫々會員證、並に會員記章を交付せらるゝ規定なるが、已に初回分を納金せられたる會員にして、右の資格を有し、尚ほ今だ會員證等を受取らざる向あらば、早速その關係勸募取扱者へ申出ありたし

一、右の申込を受けられたる取扱者は、その會員別、氏名、初回納金の時日を具して、品川支所へ通告ありたし

一、品川支所にては、右通告に從ひ取調の上、未交付なるとを認めたる上は、速に交付方取計ふべし

教學財團基金寄附申込表（第九回）（品川支所取扱）

特別會員

金壹百圓　東京市駒込顯本寺住職　山崎日暐

通常會員

金貳拾圓　福島縣二本松町本久寺住職　笹本春義

金拾五圓　靜岡縣田方郡大土肥妙高寺住職　木下圓通

賛助會員

金五圓　千葉縣山武郡土氣善勝寺檀家　吉原忠三郎

金五圓　東京市駒込顯本寺檀家　小原邦憲

金六圓　山形縣東置賜郡堀金寶藏寺住職　鈴木乾徹

千葉縣館山町本蓮寺檀家（第三回）

金參圓　鈴木貞守　金參圓　山口久三郎

金貳圓　萩原金治郎　金貳圓　山根百藏

仝　山根佐一　仝　小瀧金治

金壹圓五拾錢　山根正五郎　金壹圓五拾錢　萩原清太郎

仝　山根幸吉　仝　岩橋乙次郎

金壹圓　小瀧民五郎　金五拾錢　山根平五郎

金五拾錢　山根八平　仝　山根清次

仝　小瀧由太郎　仝　小瀧若松

仝　小瀧惣助　仝　小瀧之藏

金五拾錢　岩橋仁平　金五拾錢　岩橋助治郎

仝　岩橋吉藏　仝　岩橋宜兄

仝　岩橋政吉

福井市妙經寺檀信

金壹圓　石田エッ　金壹圓　井上きん

仝　甘利とら　仝　青木こん

東京府品川町本光寺檀家（第一回）

護持會員

金六拾圓　小網源太郎　金五拾圓　栗原政次郎

金五拾圓　江川吉五郎

正會員

金四拾圓　上野金一郎　金參拾圓　福岡十太郎

金參拾圓　片山與吉　仝　中田寅一郎

仝　綱島榮太郎

通常會員

金貳拾圓　石井清吉　金貳拾圓　根岸文三郎

仝　青沼義春　仝　中島吉藏

金拾圓　牛田恒吉　金拾圓　藤田しげ

仝　毛塚金藏　仝　井上松五郎

仝　小野原鶴吉　仝　金子岩吉

賛助會員

金九圓　森崎善太郎　金五圓　飯田要

金五圓　坂卷高

會員外

金六拾圓　品川本光寺檀家　多部甚之助、外特志者

金五百圓　東京淺草慶印寺檀家總代　（本橋利平　小川平右衛門　須田喜代松）

教學財團基金寄附受領表（第七回）（京都本部取扱）

金四千圓（二回）　鳥取縣東伯郡東郷村　市橋亀藏

金壹百圓（初回）　大阪市西高津中寺町　蓮成寺檀家中

金貳拾貳圓五拾錢（初回）千葉縣市原郡姉ヶ崎

妙經寺住職　山本日悟

金六拾錢（初回）　仝縣仝所　常敬坊住職　齋藤立靜

金四圓（初回）　仝縣千葉郡逼田妙本寺住職　鵜澤純眞

金貳圓（初回）　山口縣都濃郡切山秋林寺住職　吉田義掌

金六拾錢（初回）　名古屋市常德寺檀家　淺井ちた

金五拾錢（初回）　京都市建仁寺町五條北入杉山　藤吉

久留米市本秦寺檀家（初回）

金四圓宛　安達貞平　平城末吉　田中三次郎　井上房太郎　井上福次郎　金貳圓宛　草場宗右衛門　辻淺次郎　金壹圓宛　川上安右衛門　高良ひつ

靜岡縣吉美妙立寺檀家（完納）

金五拾錢宛　加藤倉吉　吉田宅次郎　金四拾錢　戸田たみ

岡山縣津山町本蓮寺檀家（六回）

金貳拾錢宛　安藤幸成　服部金五郎　宮崎賢治郎　妹尾爲吉

山口縣都濃郡秋林村檀家（初回）

金拾圓　河村勘藏　金四圓宛　河村安之進　河村和作　金參圓　河村拾藏　金貳圓六拾錢　桑島數之進　金貳圓宛　河村克次　大木德太郎　古本勝之助　金壹圓　桑島健藏　金貳拾錢宛　貞木六松　山下忠治

東京府本染寺檀家

金貳圓(二回)高橋爲三郎　金五拾錢(四回)柳下長次郎　金參拾錢宛(四回)鈴木伊之助　小林清次郎　金貳拾五錢(二回)磯目久一　金拾七錢宛(四回)渡邊銀次郎　平山龜藏　鈴木梅吉　金八錢五厘(三回)山本宗明　平金同(四回)安齊德太郎　田中勝之

同表（第八回）（京都本部取扱）

千葉縣館山町本蓮寺檀家(初回)

金四圓(住職)中山智秀　金壹圓貳拾錢小芝久治　金六拾錢宛中山爲太郎　吉野庄藏　吉田四方造　小高岩次　鈴木爲吉　忍足丑松　井口忠七　金四拾錢宛岩崎源右衛門　石井新藏　中山祐太郎　堀口龜太夫　飯田亦吉　藤村吉五郎　榎本三平　金參拾錢唐澤茂三郎　金貳拾錢宛池田三次　石渡竹次郎　川名直吉　中島仙松　上田卯之助　金拾錢宛黑川半平　池田寅之助　獅子田仁右衛門　田中清右衛門　高島ッヤ　井上兵四郎　高橋助治　小西藤平　松本芳松　吉田清右衛門　小杉象吉　石渡寅松

岡山縣津山町本蓮寺檀家(七回)

金貳拾錢宛　安藤幸成　服部金五郎　宮崎賢治郎　妹尾爲吉

東京府本染寺檀家

金參圓(初回)大竹昌德　金五拾錢宛(初回)大竹昌藏(六回)柳下長次郎　金參拾四錢永井新藏　金參拾錢宛(六回)瀧川桂之助　小林清次郎　鈴木伊之助　金拾七錢宛(六回)長坂吾三郎　渡邊銀次郎　鈴木梅吉　平山龜藏　金八錢五厘宛(六回)田中勝之　山本宗明　安齊德太郎

訂正　一月統一本表中、千葉縣君津郡大竹本泰寺角川泰碩第一回納金壹圓四拾錢とあるは「金貳圓四拾錢」の誤、又四月統一本表中、金谷常泉寺とあるは、大竹常泉寺、東榮寺は滿榮寺、の誤

生徒募集廣告

一豫科普通科生　三名

但シ一學年二學年ノ兩學年ニ限ル

右望ノ者ハ八月十五日迄ニ願出ベシ

七月

大學林

(三法堂目印)

木像具　金佛具　木像子　大販賣

佛書表具の元祖　各宗御寺院御入用品一切何にても多少に限不御注文仰付らるべし佛書は申すに不及御肖像畫專門　木魚位牌卸小賣

小包條例附郵券四錢

佛畫佛具佛像位牌木魚其種類品有之候を以て一々記載する能はず依て特に佛畫正價附發賣目錄書を作製致置候に付御入用の諸君は郵券四錢御送付被下候はゞ迅速進呈仕候此の目錄御用ゐになれば寺院樣方の御入用品一切の買物何程遠方でも座ながら安價にて買はれ升其の正札附の品は左の通り

注意

●佛畫具一切●過去帳の類●大般若經●一切藏經●理趣分●位牌●太鼓●佛具金物一切●釣鐘●半鐘●木魚●拂子●曲錄●香●珠數●大傘●扇子●中啓●燈籠●鉦●金鑼類●ヤ引打敷●袈裟●唐幡●人天蓋●樂器●類●施餓鬼幡●屏風●木像厨子●木草●經机●聖字●懸盤●鐘●聽量器●三寶揃並に桃平●刷毛●硯箱●筆●硯●茶器●葉子盆●行鉢●膳●量器●自鉢●板●盛物臺●高皿●製裝文車●靈具揃椀●線香●香具類●正價にて各宗御用達　京都小橋三條通中島町西入　三法堂藤田總治

東入下ル

三法堂陳列所

腦脊髓精神病　帝國腦病院

東京市神田區和泉町

(電話　下谷七一七番)

院長ドクトル齋藤紀一明治卅三年專門學研究の爲め獨逸へ留學卅六年同大學卒業尚進て英佛專門病院を視察兩院にて診察す

精神病　專門　青山病院

東京市青山南町

(電話新橋三六四五番)

明治四十年七月十五日發行

發行人　井村恂也

編輯人　山根頭道

印刷人　鈴木暐學

印刷所　北澤活版所

東京淺草區南松山町四十五番地

發行所　統一團

統一

第百五十號

明治三十年二月二十四日　第三種郵便物認可
明治四十年七月十五日發行　統一第百四十九號　（毎月一回十五日）
四十年八月十五日（毎月一回十五日）發行

發行所　東京淺草區南松山町十五番地（振替貯金口座一二一九番）　統一團